|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **復命書/出張報告書** |  | 米 丸・前 田 |
| 出張日程 | 201１年１０月２８日～30日 |

**≪日本財団　山村留学先進地域視察≫**

◆日時：平成２３年１０月２８日（土）～10月30日（日）

◆場所：海士町

◆対応：岩本悠氏（高校魅力化プロジェクト　海士町教育委員会）

　　　　　※島留学を推進し、来年度から離島初1クラス→2クラスへ増員成功の立役者

　　　　豊田庄吾氏（高校魅力化プロジェクト　隠岐学習センターセンター長）

　　　　　※高校と連携した公営塾塾長。前職のキャリア教育のスキルを使って、

子どもの「生きる力」を引き出す講義を展開。

　　　　大江和彦氏（海士町役場　産業創出課課長）

　　　　　※地元出身の行政マン。かなりのやり手、かつIターン者を活用し、海士長全体の

　　　　　　促進を図っている。

　　　　阿部裕志氏（株式会社巡の環　代表取締役）

　　　　　※Iターン者。海士町を通じて、教育事業、WEB発信事業を展開。

　　　　★その他物産関係者は別途報告

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

高校魅力化プロジェクトについて（岩本氏、豊田氏）

　・詳細は別途PDFを参照

　・基本的に事業紹介の後、こちらからの質問に答えてもらう形で進行。

　・Qなぜ高校からの改革だったのか？

　　　→単純に高校が廃校の危機にあったから。取り組みやすいのは、本来は小中学校。

　　　　（小中学校は町教委管轄。高校は県教委管轄）

　・Q当初危機感の薄かった地元関係者の危機意識をどうやって高めたのか？

　　　→将来図をグラフや数値をもとに、高校がなくなるとどのような現象が起こるかを

　　　　指示した。

　　　→とにかく集落単位で話をして回った。

　　　→地元の入り方を地元住民（役場の大江さん）にアドバイスしてもらいつつ行動した。

・Q具体的にどう動いたのか？

　　　→1年目はとにかく関係者に会いに行く、話をしに行くことを少しずつ進めていった。

　　　→2年目はワーキンググループ結成

　　　→3年目具体的に受け入れ体制を整えた

　・Qプロジェクトを進めていくうえで有効な手段は？

　　　→知事、町長、教育長と仲良くなる

　　　→学校に入り込む（岩本さんの場合、学校の職員室に机を配置してもらい、つねに学校の

　　　　環境の中に身を置いた。

　・QNPOという立ち位置で、学校を巻き込んでプロジェクトを進めていく事が非常に難航

している。岩本さんならどうすすめるか？

　→とにかく学校の中に仲間を作ること。「学校」という特殊かつ閉鎖的な環境に切り込んでい

くには内側から鍵を開けてくれる人が必要。自分の場合は、「教育委員会スタッフ」という

名目で自分を自ら中へ投入したが、無理なら学校サイドに仲間を作る必要あり。

　　　→もしくは「コミュニティスクール制度」を立ち上げて、そのワーキンググループに自分を

入れ込むことが重要。「NPO」という肩書以外のもので動くべき。

海士町の取り組み（大江氏）

　・詳細は別紙参照

　・時間ぎりぎりまで紹介してくださったので、質問時間はわずか。

　・とにかく町長の存在が大きいとのこと。

　　「責任は俺がとるから自由にやれ」的リーダーで、熱意がある人の企画には賛同。

　　その対応に感謝した部下たちが恩義を感じ、より一層尽力し結果を出していく。

　　信用が信用を呼び、士気の高い風土が育っている。

巡の環の教育事業（阿部氏）

　・社会人の教育事業を実施。

　　（社員研修、大学ゼミ研修等の受け入れを実施。）

　・地域の人と泥臭く付き合うことで、溶け込み、島のニーズをとらえている。

　・フィールド研修＋ワークショップ　という形で大人向け教育事業を展開。

　　その手法は小値賀（野崎島）でも大いに参考になるやり方だと思った。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上